早稲田大学　商学部

2024年度　入試問題の訂正内容

＜一般選抜＞

【国語】

●問題冊子５ページ：一問四

試験前に解答用紙に不備があることが判明したため、

解答対象から外しました。

以上

一

次の文章は、ノスタルジアとユートピアとの関係について論じた本から一部を抜粋したものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

1〈進歩としての歴史〉という、そもそもは十八世紀の西欧に生まれたローカルな社会の地形は、欧米列強の植民地支配をはじめとする非西欧世界への進出、日本や中国、ロシアやトルコなどにおけるそれに対抗する近代化、植民地化された諸地域・諸国の独立と近代化の運動、それらを通じて展開していった地球規模での人類社会の政治的・経済的・文化的な交通・交流によって、人類史上初めて、2文字通りグローバルに共有される世＝界の体制と社会の地形となった。だがしかし、理念としては人類という集合体によってグローバルに共有されるこの〈進歩としての歴史〉は、マンフォードが近代におけるユートピア的な集合表象＝社会神話としてあげていた、国民国家National State, nation-stateというローカルな表象を媒介として現実には追求されていったことに、ここでは注目しなくてはならない。

3国民や国民国家がユートピアであるとは、奇妙なことのように思われるかもしれない。なぜならそれは、十九世紀から二十世紀の社会における確固たる現実として〈あること〉だったものと、今日の私たちの多くには思われるからである。

マンフォードが国民国家を国民的ユートピアであると述べたのは、ブルジョワ階級の消費生活の理想の追求が生み出した「カントリー・ハウス」の理念と、労働者たちが生産に従事する場として近代産業化が生み出した「コーク・タウン」――石炭を燃料とする工業都市――の矛盾対立を、巨大都市を媒介項として結びつけ、編成し、国民的かつ国土規模での新たな社会の実現を目指すものとして、マンフォードが国民国家を理解したことによっている。それは、歴史と風土の中で形成された〝くに〟や地域を超えて、人為的に設定された境界内の国土上で、中央政府とその官僚組織が人間の全生活と全交際を処理する、人工の社会なのだとマンフォードは述べる。今まで存在してこなかった社会を、現状において〈あること〉の問題を解決するための〈あるべきこと〉として人工的に作り出そうとしたものであるという意味で、国民国家はユートピアであったということである。

事実、一九一七年にレーニンヒキいるソヴィエト政府が発した「平和に関する布告」が民族自決を無賠償・無併合とともに呼びかけ、一九一八年に合衆国大統領ウィルソンが「十四ヶ条の平和原則」に民族自決を記載してヴェルサイユ条約の原則となったように、二十世紀初めの人類社会において国民や国民国家であることは、いくつかの国々においてはすでに〈あること〉だったとしても、多くの諸民族にとっては目指されるべき〈あるべきこと〉だった。そしてまた、すでに国民国家化した諸国にとっても、真に「国民的な国家National State」であることは現在において、そしてまた未来に向けて目指すべき〈あるべきこと〉だったのである。

近代政治史におけるユートピアとしてマンハイムは国民国家をあげることはしなかったが、自由主義―人道主義の理念や保守主義の理念はもちろんのこと、当初はインターナショナリズムを志向していた社会主義―共産主義のユートピアも、ネーション――民族、国民――やネーション・ステイト――国民国家――を社会の地形における空間的な枠組みとして、〈 A 〉の実現を目指していった。

さらに二十世紀半ばの世界には、理念的な意味での自由主義―人道主義の理念や社会主義―共産主義のユートピアよりもはるかに歴史的現実に近づいたユートピアとして、国民国家というユートピアの変奏としての「帝国主義のユートピア」や「植民地主義のユートピア」、「全体主義のユートピア」や「ファシズムのユートピア」が存在した。戦前期日本――「大日本帝国」というその正式名称は十分にユートピア的だったのではないだろうか――にとっての満州国や大東亜共栄圏とそのスローガンだった八紘一宇も、ナチスドイツにとっての第三帝国Drittes Reich――同じReichという言葉をブロッホは、彼のユートピア論で用いていた――も、国民国家というユートピアの誇大妄想化した形象だったのだ。

事実上はディストピアでもあったこれら誇大妄想的なユートピアが潰えた後、二十世紀後半には、植民地化され、あるいは傀儡政権や軍事独裁政権の下におかれた諸地域・諸国家で、自律した国民となり、また国民国家となることが、独立や革命によって目指されるべき〈ユートピア的なもの〉となった。それらは、先進諸国における反戦・反帝国主義運動や学生運動、文化革命運動などとも連動して、一定のユートピア的なリアリティとアクチュアリティをもちえていたのである。

このように、ある地域の言語的、文化的、政治的な共同体が〝ネーションであること〟も、ネーションとして自らを

社会の地形の上に位置づけた集団が〝国民国家として政治的、軍事的、経済的、文化的な発展と繁栄を追求していくこと〟も、近代的世界においてまずは〈 B 〉ではなく〈 C 〉だったのである。そしてまた、いったん国民国家が成立した地域や集団においてもそれは、〈 D 〉として追求されることによって事実性をもち続けることができる、遂行的な社会的事実なのである。ナショナリズムとは、すでにある国民や国民国家に排他的な価値を見出すことである以前に、〈 E 〉として国民や国民国家を目指す／目指し続けることなのだ。

ブロッホ、マンフォード、マンハイム、ミンコフスキーらのユートピア論の背景となっていた第一次世界大戦も、その後に起こった第二次世界大戦も、民族・国民・国民国家たろうとする集団の対立や生存圏の拡張をめぐるものだった。

4 十九世紀後半から二十世紀には、古典的な意味での地上のユートピアの存在をフィクショナルにでも想像しうる〈他の空間〉が存在する余地は、地球上からほとんど失われていたが、二十世紀半ばまでは、植民地支配や帝国主義的侵略という、〝大国〟や〝先進国〟による国民国家の空間的拡張があからさまに行われていた。有限な地球表面上に並存する国民国家が、未来における〈 F 〉の実現をめざし、b キショウな資源と領土をめぐって争い、二つの世界大戦とより小規模な多くの戦争や紛争を生み出していったのである。

5 ヨーロッパにおいてナショナリズムは、十八世紀という「宗教的思考様式の黄昏」の時代に夜明けを迎え、啓蒙主義と合理主義的世俗主義の時代に、宗教的なものに代わって世界に意味とリアリティを与えるものとして、政治的のみならず文化的な重要性を高めていった。それは、6 西欧においてユートピア文学が成立し、流行し、そこで語られるユートピアのありかが〈他の空間〉から〈他の時間〉へと転位していった時代の中におさまっている。国民国家が近代における社会神話としてのユートピアであるとするマンフォードの指摘と、このことは整合する。ここでの考察にとってさらに重要なことは、ナショナリズムの誕生と流行が、スイス人に特有の病として発見されたノスタルジアが他の諸国民の間にも流行し、その対象が故郷という〈他の空間〉から過去という〈他の時間〉へと移行していった時代とも重なっているということである。

7 十八世紀にノスタルジアがスイス人以外の多くの民族・国民に見出されるようになると、それは祖国を離れた兵士たちの士気を阻喪させるという意味で、愛国心やナショナリズムにとって公共的な脅威であると見なされることがある一方で、他方では強い愛国心やナショナリズムの表れとしても理解されるようになっていった。ドイツ語の Heimweh、フランス語の maladie du pays、スペイン語の mal de corazón が、ノスタルジアという諸国民に共通する感情を指す "nostalgic esperanto" の一部となっていくと共に、それぞれの民族や文化の固有性と強く結びついたものとしても主張されていったのである。Heim は「故郷」、pays は「国」、そして corazón は「心」である。

ベネディクト・アンダーソンは、『想像の共同体』で次のように述べている。

〔十八世紀という：引用者注〕この啓蒙主義の時代、合理主義的世俗主義の世紀は、それとともに、独自の近代の暗黒をもたらした。宗教信仰は退潮しても、その信仰がそれまで幾分なりとも鎮めてきた苦しみは消えはしなかった。楽園の崩壊、これほど宿命を偶然と感じさせるものはない。救済の不条理、これほど別の形の連続性を必要とさせるものはない。そこで要請されたのは、運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換することであった。以下に述べるように、国民の観念ほどこの目的に適したものはなかったし、いまもない。国民国家が「新しい」「歴史的」なものであると広く容認されているにしても、それが政治的表現を付与する国民それ自体は、常に、はるかなる過去よりおぼろな姿を現し、そしてもっと重要なことに、無限の未来へと漂流していく。

国民国家が「歴史的」であるという表現によってアンダーソンが意味しているのは、それが人類史において 〔 G 〕 なものではなく、近代における発明であり、流行であるということだ。だがその一方でそれは、歴史の広大な広がりの中ではるかな過去から無限の未来に向けて連続して存在するものとして想像されるという意味でも〝歴史的〟な存在なのである。ここで〝歴史的〟というのは、近代という特定の歴史的時代に成立したということであると同時に、その時代に成立した特定の歴史性の体制と不可分のものだということでもある。

近代化する以前の世界で、地球上の諸文化・諸文明はそれぞれに異なる世＝界の体制の下にある、異なる社会の地形の中にそれぞれをc テイイさせていた。だが、過去から現在を経て未来へと進歩していく――あるいはその陰画として衰退していく――社会の時間的地形は、そのように理念的に理解される限りでは、あらゆる人間に妥当する普遍的な〈人

類史としての世界史〉である。その一方で、[8]そうした過程は現実には、地球上の特定の土地や文化と結びついた人間の集団によって歩まれるものとして了解され、また現象してきた。ネーションや国民国家は、人類の進歩という普遍的な過程を、地球上の特定の領域に対する帰属性と主権をもった排他的かつ特殊な主体によるものとして、地理的世界の中に位置づける。その時、〈進歩としての歴史〉はそれぞれの国民と国民国家の進歩の歴史となると同時に、そこに生きる人びとが自らの国民性を生き、発現させ、国民としての国家を建設する歴史となるのである。

〈進歩としての歴史〉における〈未来〉というユートピアは、社会の構造を変え、地域社会の環境や風景を変え、人間と社会をかつてそれらが帰属していた場所から社会的にも物理的にも切り離していく近代化の過程を、〈あるべきこと〉へと向かう過程として社会の地形の上に位置づけるものだった。だが、マンハイムが近代におけるユートピアのひとつとして保守主義の理念をとりあげたように、〈いま・ここ〉に〈あること〉を支えてきた伝統が進歩によって解体されることへの不安は、進歩への対抗ユートピアとしての保守主義の理念を生み出すものであった。ナショナリズムは、進歩主義のまなざしの中では未来のユートピアへと共に進む共同体としてネーションと国民国家を想像することを可能にする。だがそれはまた、保守主義のまなざしにおいて、神話的な過去から続く歴史と伝統の連続性の中で〈いま・ここ〉を了解することもまた可能にしたのである。[9]かくしてネーションと国民国家は、進歩主義的なユートピアと、進歩主義への反動としてのノスタルジアを結びつける。

（若林幹夫『ノスタルジアとユートピア』による）

問一 傍線部a～cの片仮名を、漢字（楷書）で解答欄に記入せよ。

問二 傍線部1「〈進歩としての歴史〉」が傍線部2「文字通りグローバルに共有される世＝界の体制と社会の地形となった」とはどういうことか。「世＝界の体制」「社会の地形」という表現に注意して、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 〈進歩としての歴史〉という、世界をグローバルな体制として認識するローカルな思想は、政治や経済や文化などの様々な活動によって広がり、世界認識のスタンダードになったこと。

ロ 〈進歩としての歴史〉は、国民国家という理想的な理念によって現実化されることで植民地化されていた地域が近代化するための目標となり、ついには人類がグローバル化されるというユートピア的な神話として共有されたこと。

ハ 〈進歩としての歴史〉という西欧が信じた進化論的な世界観にすぎなかったものが、外の地域を植民地化するなどの行為などによって、前近代的な地域に対して西欧こそが進歩した地域として世界に認識されるに至ったこと。

ニ 〈進歩としての歴史〉は、マンフォードが言うようにすでに現実にあった国民国家をユートピアとする倒錯した認識として世界中に広まり、一八世紀には非西欧世界も次々と国民国家を実現することによって近代化という理想に近づいたこと。

問三 傍線部3「国民や国民国家がユートピアであるとは、奇妙なこと」であるのはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 現実に存在する、問題を抱えた国民国家を人工的に作られた理想を体現したこうあるべき国民国家だとしていたはずだから。

ロ 国民国家は、国家内にある様々な矛盾を解決するために国民自身ではなく、中央政府と官僚組織が作り出した人工的な国家モデルにすぎなかったはずだから。

ハ 国民国家を、ブルジョワ階級と労働者階級に階級分化した現実にある社会問題を解決できる、ありもしない理想的な国家であるかのように作り上げようとしたはずだから。

ニ 国民国家は、分断された社会や多くの問題を抱えた国にとって、国民を法などによって統合することで問題を解決するために作られた、すでに存在する国家モデルだったはずだから。

問四　空欄 A から F には「あること」か「あるべきこと」が入るが、「あること」が入るのは一カ所だけである。それを解答欄にマークせよ。

問五　傍線部4「古典的な意味での地上のユートピア」とあるが、この本文の趣旨に照らしてどのような意味と受け取ればいいか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　想像の共同体。
ロ　誇大妄想化した国民国家。
ハ　未来を先取りした国民国家
ニ　まだ征服されていない理想郷。

問六　傍線部5「ヨーロッパ」の「ナショナリズム」が、傍線部6「西欧においてユートピア文学が成立し、流行し、そこで語られるユートピアのありかが〈他の空間〉から〈他の時間〉へと転位していった時代の中におさまっている」のはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ヨーロッパは、世界中の地域や国をすでに支配していたので、ユートピアをもはや自国の未来に求めるしかなくなっていたから。
ロ　ヨーロッパでは、国を統一する思想の原理を他の地域に求めることができなくなって、それぞれの国の過去に統一原理を求めるしかなくなってきていたから。
ハ　ヨーロッパでは、未知の発見という希望が持てなくなっていたことと、既知の再発見がヨーロッパ人に特有の病として文学にも書かれるようになったことが軌を一にしていたから。
ニ　戦争にかり出されたスイスの兵士の間でノスタルジアという病が流行してまたたくまにヨーロッパ全域に広まったことと、もはや現実には手に入らなくなったユートピアが文学においては成立したこととが同じことだから。

問七　傍線部7「十八世紀にノスタルジアがスイス人以外の多くの民族・国民に見出されるようになると、それは祖国を離れた兵士たちの士気を阻喪させるという意味で、愛国心やナショナリズムにとって公共的な脅威であると見なされることがある一方で、他方では強い愛国心やナショナリズムの表れとしても理解されるようになっていった」とあるが、「ノスタルジア」がX「祖国を離れた兵士たちの士気を阻喪させる」ことになり、また、Y「強い愛国心やナショナリズムの表れとしても理解される」ことになったのは、それぞれ兵士たちが何を求めたからか。それぞれ一〇字以上一五字以内で本文から抜き出して解答欄に記せ。

問八　空欄 G に入るべき語を次の中から選び、解答欄にマークせよ。

イ　現実的　　ロ　普遍的　　ハ　理想的　　ニ　歴史的

問九　傍線部8「そうした過程は現実には、地球上の特定の土地や文化と結びついた人間の集団によって歩まれるものとして了解され、また現象してきた」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　西欧を〈人類史としての世界史〉を実現したリーダーだと理解したこと。
ロ　西欧がもっとも進化した理想の世界だという共通認識ができたこと。
ハ　西欧の発展や衰退が人類の発展や衰退のモデルとして機能したこと。
ニ　多くの国々が西欧を目標として、自らの国家建設を成功させたこと。

問十　傍線部9「かくしてネーションと国民国家は、進歩主義的なユートピアと、進歩主義への反動としてのノスタルジアを結びつける」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　国民国家こそが現に存在する進歩の歴史の産物なのだが、同時にそれを幻想と呼ぶ力学を必然的に引き起こす矛盾したシステムでもあるということ。

ロ　国民国家においては、地球環境を変えていく未来のユートピアと、過去の神話を重視する伝統的ユートピアとが矛盾なく結びつくということ。

ハ　国民国家は、人類に進歩という名の歴史認識をもたらしたが、それを特定の国が主導することへの反発により、神話こそが歴史だという新しい歴史観が生まれたということ。

ニ　国民国家は、いまだ実現していない理想の到達点をイメージさせるだけでなく、そこまでのプロセスを過去の歴史への回帰のような形で包含して、自らを強固にしているということ。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

近き世のことにや、仁和寺の奥に同じさまなる聖、二人ありけり。一人を西尾の聖といひ、今一人をば東尾の聖と名付けたり。この二人の聖、ことにふれて徳をいとなみ、一人は如法経書けば、一人は如法念仏す。一人五十日逆修すれば、一人は千日講を行ひなど、互ひに劣らじとしければ、人もひきひきに方々別れつつ結縁しけり。

年ごろかくの如くいとなむあひだ、西尾の聖(注)身燈すべしといふこと聞こえて、結縁すべき人、貴賤道俗市をなして、尊みこぞる。東尾の聖、これを聞きて、「狂惑のことにこそあらめ」とて信ぜざるほどに、つひに期日になりて、弟子どもいみじく囲繞して、念仏して火屋に火をさす。ここら集まりし人、涙を流しつつ尊みあへるほどに、火中にて、念仏二百返ばかり申して、つひにいみじく尊げなる声にて、「今ぞ東尾の聖に勝ちはてぬる」といひてなん、終りにける。

このことを［A］人は「尊し」とて、袖をうるほして去りぬ。おのづからもれ［B］者は、思はずに、「[1]こは何事ぞ。いと本意ならず。妄念なりや。定めて天狗などにこそはなるべかり［C］。益なき結縁をしてげるかな」なんどいひけり。まことに、あたらに身命を捨てて、さる心を発しけん、めづらしき身なるべし。

ある人語りていはく、「唐に帝おはしけり。夜いたう更けて、燈壁にそむけつつ、寝所に入りて静まりぬるほどに、火の影にかげろふものあり。あやしくて、寝入りたる様にてよく見給へば、盗人なるべし。ここかしこにありきて、御宝物、御衣など取りて、大きなる袋に入れて、いとむくつけなくおぼされて、いとど息音もし給はず。かかるあひだ、この盗人、御かたはらに薬合はせんとて、灰焼き置かれたりけるを見つけて、さうなくつかみ喰ふ。『いとあやし』と見給ふほどに、とばかりありてうち案じて、この袋なるものども取り出でて、[2]みなもとの如く置きて、やをら出でなんとす。その時、帝いと心得がたくおぼして、『汝は何者ぞ。いかにも、人のものを取り、また、いかなる心にて返し置くぞ』とのたまふ。申していはく、『我は某と申し候ひし大臣が子なり。幼くて父にまかりおくれて後、堪へて世にあるべきたつきも侍らず。さりとも、今さらに人のやつことならんことも、親のため心憂く思ひ給へき。念じて過ごし侍りしかど、今は命も生くべきはかりことも侍らねば、盗人をこそ仕らめと覚えて侍るにとりて、なみなみの人のものは、主の嘆き深く、取り得て侍るにつけて、ものぎよくも覚え侍らねば、かたじけなくもかく参りて、まづものの欲しく侍りつるままに、灰を置かれて侍りけるを、さるべきものにこそと思ひて、これを食べつるほどに、物の欲しさなほりて後、灰にて侍りけることをはじめて悟り侍れば、せめては、かやうの物をも食し侍りぬべかりけり。由なき心を発し侍りけるものかなとくやしく思ひて』なんど申す。

帝つぶさにこのことを聞き給ひて、御涙を流され、感じ給ふ。『汝は盗人なれども、［D］なり。心の底いさぎよし。我、王位にあれども、［E］といふべし。空しく忠臣の跡を失へり。早くまかり帰り候へ。明日召し出だし、父の跡を起こさしめん』と仰せられければ、盗人、泣く泣く出でにけり。その後、本意の如く仕へ奉りて、すなはち父の跡をなん伝へたりける」。

しかれば、[3]上人の身命を捨てしも、他に勝れ、名聞を先とす。[4]貧者が財宝を盗めるも、清くうるはしき心あり。すべて、人の心の中、たやすく余所にはかりがたきものなり。されば、「魚にあらざれば、水の楽しみを知らず」といふも、この心なるべし。

（『発心集』による）

（注）身燈…身体に火をともし、仏に供養すること。

問十一　空欄［A］・［B］に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ　出づる　　ロ　信ずる　　ハ　聞ける　　ニ　信ぜぬ　　ホ　聞かぬ

問十二　傍線部1「こは何事ぞ」の「こ」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　西尾の聖が身燈したこと
ロ　貴賤道俗が市をなしたこと
ハ　東尾の聖が信じなかったこと
ニ　東尾の聖に勝ったと述べたこと
ホ　人々が袖を濡らして去ったこと

問十三　空欄 C に入る語として最も適切な形に助動詞「ぬ」を活用させて、ひらがなで解答欄に記せ。

問十四　傍線部2「みなもとの如く置きて、やをら出でなんと」した理由の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　灰の薬を食べたことで、気分がすっきりして、よくないことをしたと後悔したため。
ロ　盗むつもりはなかったのに、いつのまにか盗みを働いていて、逃げたくなったため。
ハ　薬のための灰を食べてしまい、すっかり気持ちが悪くなり、我慢できなくなったため。
ニ　灰を食べてさえ、食欲が満たされるのだから、何を食べても生きられると思ったため。
ホ　盗みに入ったものの、しばらくして、自分が何をしているのかに気づき、驚いたため。

問十五　**帝の寝所**に盗人が入った理由として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　大臣の子であったが幼いときに父に先立たれたから。
ロ　普通の人のものは、盗めば持ち主が嘆くだろうから。
ハ　大臣の子であった自分を取り立ててくれなかったから。
ニ　他人の召使いになるのも親のことを考えるとつらかったから。
ホ　我慢して生きてきたけれども生きる手立てもなくなったから。

問十六　空欄 D ・ E に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ　賢者　　ロ　愚者　　ハ　富者　　ニ　貧者　　ホ　勇者

問十七　傍線部3「上人」と傍線部4「貧者」は、この話の中の誰を指すか。最も適切なものを次の中から一つずつ選び、傍線部3は（a）、傍線部4は（b）の解答欄にマークせよ。

イ　西尾の聖　　ロ　東尾の聖　　ハ　ある人　　ニ　帝　　ホ　大臣が子

三 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

朱了頭者、婁県農家子也。家本赤貧、又煢煢無所依、日行乞於市。咸豊辛酉歲、粤賊自嘉善趨楓涇、遇之、劫与俱去。朱曰、「我丐也。A 無錢財自贖、又無一芸可供爾用。何劫我為。」賊曰、「汝既丐也。饑寒之困甚矣。従我去、不憂不富貴。」朱怒曰、「我惟甘饑寒、故丐耳。否則為竊為盗、胡不可乎。我不為竊為盗、乃従爾等作賊乎。」抗声大罵、遂見害。嗚呼、如朱了頭者、可謂有古烈士風矣。

（俞樾『右台仙館筆記』巻一による）

注 婁県…地名。　煢煢…ひとりぼっちの意。
咸豊辛酉歲…清朝の咸豊十一年。一八六一年。
粤賊…洪秀全を天王とした太平天国の乱（一八五一年～一八六四年）の乱徒。
嘉善…地名。　楓涇…地名。
丐…「乞」に同じく、ものをこう、乞食すること、こじきの意を表す。

問十八 空欄 A に入る最も適切な漢字一字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 況　ロ 雖　ハ 既　ニ 仮　ホ 猶

問十九 傍線部1「無一芸可供爾用」の読み方として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ いちげいもなくなんぢのようにきようすべし
ロ いちげいのなんぢのようにきようすべきなし
ハ いちげいとしてなんぢにきようすべきようなし
ニ いちげいもなんぢにきようしもちふべきなかれ
ホ いちげいをなんぢのようにきようすべきことなかれ

問二十 傍線部2「不憂不富貴」にふさわしい返り点を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 不レ憂不レ富貴
ロ 不レ憂不二富貴一
ハ 不三憂不二富貴一
ニ 不レ憂レ不二富貴一
ホ 不レ憂レ不レ富貴

問二十一　本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　粤賊に従って富貴を得るようにおどされながら、自らは飢寒に甘んじて乞食すると説いて殺害された朱了頭は、古の烈士のごとき人物と評された。

ロ　窮乏して流浪する朱了頭は、遭遇した粤賊になけなしの金銭や役立つ技芸の供出を求められたが、乞食する窮迫を声高に訴えて賊に加えられる危難を逃れた。

ハ　粤賊は朱了頭に、自分たちに従属すれば金品を手に入れて富貴の身になると吹聴したが、朱了頭は、烈士のごとく飢寒を凌ぐだけで十分であると言って拒絶した。

ニ　盗賊にも等しい粤賊の窃盗行為を声もろともに指弾して見せた朱了頭は、古の烈士さながらに自らの尊い命を絶って後世に名を残すことになった。